現場の先生のための
「進路指導」相談講座

対話を始める

— 第3回 —

取材・文／塚田智恵美
撮影／平野 愛

進路指導の場面で悩む場面、ふと立ち止まる瞬間があっても、立場上、なかなか率直に相談できる相手がいなくて、お困りの先生方も多いはずです。カウンセリングの領域では、カウンセラーが自身の担当する個別のケースについて、熟練した指導者と対話し、自身のカウンセリングの過程や問題点を振り返ることで、よりよいカウンセリングのあり方を模索する手法があります※。この連載ではキャリア・カウンセリングの専門家である三川先生と現場の先生方の対話を通じて、現場の先生ご自身が「よりよい進路指導のあり方」を考えていく様子をレポートします。

※「スーパービジョン」という手法。事例をもつカウンセラー（スーパーバイジー）と指導者（スーパーバイザー）で行う。

監修&アドバイス

追手門学院大学心理学部
教授
三川俊樹先生

追手門学院大学心理学部教授。カウンセリング心理学専攻。大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了（学術修士）。スーパーバイザーなどとして活躍。2023年5月まで日本キャリア・カウンセリング学会で理事・SV委員長を務めた。

CASE.3　県立高校　教務主任　櫻井先生（仮名）　40代前半

本校には以前から、教員を志望する生徒が多くいます。ただ近年、職業選択で働き方やワークライフバランスを重視する風潮もあってか、教員を志望する生徒や保護者からこんな相談を受けることが増えました。

高3の
生徒Cさん

学校の先生になりたいのですが、よく
「忙しい仕事で、“ブラック”だという人もいる」と聞くので、どうすべきか悩んでいます。
親からも「大変な仕事だから、やめたほうがいい」と言われて…。

櫻井先生

…「ブラック」だと感じている人も、そうとは思っていない人もいるので、一概には言えないのだけど…。

私自身は自分の働き方を「ブラック」とは思いません。ただ職場環境をどのように捉えるかは、赴任先の環境や本人の主観によるところが大きく、どうとも言い難いのが正直なところです。ニュースなどで教員の働き方が問題視されることも増え、保護者から「本人は教員になりたがっているが、心配だ」という相談を受けることも。私が安易に、教員の魅力ややりがいを伝えてはならないような気がしてしまいます。

「教員はやりがいのある仕事だ」と言っていいのか…。

ブラックかどうかの認識は人それぞれで断言できない…。

一体、何と言ってあげればいいのだろう？

次ページではこのケースについて、三川先生と対話していただきました。

教員の働き方の話から ある「対話不足」の問題に行き着く

三川先生

先生ご自身はやりがいをもって働いているのに、教員を志望する生徒やその保護者が、教員の働き方について不安視しているのですね。

櫻井先生

本当は教員という仕事の魅力を伝えたいのですが、世間の目も厳しく、安易に「やりがいのある仕事だ」と言っていいのかと…。

ほかの職業なら背中を押せるのに…

三川 難しい問題ですね。ブラックという言葉はひとまず置いておいて、櫻井先生ご自身は、教員という仕事のどんなところに、やりがいを感じていらっしゃいますか？

櫻井 多感な時期を送る生徒たちの、成長や変化の過程に深く関わることができるところです。進路指導でも、それぞれの向き・不向きを知り、個別に声かけができるので、やりがいがあります。

三川 個別にアプローチをして、生徒の可能性を開いていくのですね。

櫻井 クラス担任をしていたとき、興味をもちそうな生徒に、地域の探究活動を勧めたんです。のちにその生徒が「地域の魅力を発信するためにユーチューバーになる」と言い出して、実現させた。自分が関わることで生徒が変わっていくのは嬉しいです。

三川 でも、動画配信にはリスクもあります。櫻井先生にご不安はありませんでしたか。

櫻井 心配はありました。炎上や誹謗中傷など、考えられるリスクについて率直に話したので、信頼できたのだと思います。

三川 ユーチューバーを目指す生徒にはリスクを伝えたうえで応援されているのに、教員を目指す生徒に対してだけ悩まれているのは少し違和感がありますが、いかがですか。

櫻井 ああ、確かに…。**ほかの職業については、マイナス面やリスクも考えたうえで、本人がやる気ならば応援したいと思っているのに、自分の職業にはブレーキがかかっていたのかもしれません**（気づき①◀）。

気づき①

不確実な面をもつ職業は教員だけではないのに、教員を特別視していることに気づきました。自分の仕事だからこそ、生々しい面も見ているだけに「うかつに背中を押してはいけない」と躊躇していたのかもしれません。でも、ほかの職業にも、就いた人にしかわからない苦労はあるはず。

働き方の理想は。鍵を握るのは主体性？

三川 さて、櫻井先生ご自身は、自分の働き方をブラックだとは思っていないのですよね。

櫻井 はい。ただ率直に言えば、全国の先生方のなかには遅くまで仕事をされていたり、家に仕事を持ち帰っていたりする方もいらっしゃいます。最近は、教科指導や部活指導以外にも、探究活動やキャリア教育など、教員が担う仕事の範囲が増えている。ただ**私の場合は、そういう近年増えた領域の仕事が、たまたま好きなんです。自分がやりたい仕事をしているので、ブラックという感覚がないのでしょう**（気づき②▼）。

三川 櫻井先生は「自分がしたい仕事をしている」という意識でいらっしゃるのですね。

櫻井 はい。自分が大事だと思う仕事に注力するためにも、不要に感じることはできるだけ業務の見直しをしています。業務量が増えれば、取捨選択が必要です。ただ、そもそも裁量を与えられていない若い先生のなかには「この業務はやめてもいいと思うのに、慣例になっていて、なかなかやめられない」と悩んでいる方もいるでしょう。

三川 では本来、どのような働き方が望ましいと、櫻井先生はお考えになるでしょうか？

自分の仕事になると、簡単に背中を押せなくなるのはなぜ？

櫻井 教員の仕事は、誰かから強制や命令をされて行うものではなく、教員一人ひとりの自主性や自律性に委ねられているものの、はずです。例えば部活の大会ひとつとっても「毎年出場しているのだから、今年も出なければいけない」と思考停止せず「私は不要だと思うから、生徒たちにも意見を聞いてみよう」といった提案をしていいはず。そうした主体性をもてるかどうかで、自身の働き方がブラックかどうか、評価も変わると思うのですが。

三川 昨今、働き方改革が叫ばれていますが、それは「働く時間をいかに少なくするか」という問題だけでは必ずしもない、ということですね。それぞれが自らの裁量で、主体的に仕事に取り組める。そんな「意識改革」も必要、とお考えなのでしょうか。

櫻井 はい、私はそう思います。

気づき②

教員の仕事といえば教科指導・部活指導だった世代には、「新しい仕事が増えてブラックになった」と見る人もいます。でも新しい教育を受けて育った今の高校生が働くころには、意識が変わっているはず。今は過渡期で、これから教員の仕事内容や、働き方への評価が変わるかもしれません。

成長と可能性を信じるには保護者と生徒の対話が必要

三川 働き方についての捉え方は、本人の意識次第でもあると。ところが櫻井先生のもとには、保護者からも「学校の先生は忙しいので、職業として就くのは心配だ」といった声が届いていると。保護者の方は何を心配されているのでしょうね。

櫻井 保護者の方は、長く、健康に勤められる仕事に就いてほしいと願っている。ただし、これは一概には言えないのですが、例えば「保健室登校をしていたが、先生に支えられて教室に復帰できた」など、先生に手を差し伸べてもらった経験から教員を志望する子も多くて。生徒自身は「自分も、あんな先生になりたい」と憧れているのですが、保護者のほうは「うちの子はメンタルが強くないのに、学校の先生のようなハードな仕事はきついのでは」と心配して…。

三川 なるほど…。余談なのですが、私のところにも「心理学部に入って、先生と同じカウンセラーを目指したい」と相談にくる高校生がいるんです。易しい仕事ではない、ということを重々わかっているから、いつもは安易に背中を押せませんが「つらかった時期にスクールカウンセラーの先生に支えてもらって…」などと切実な志望動機を語る生徒には、思わず「待ってるね」と言ってしまう。自分の過去を乗り越えようとしている思いを肯定したいと感じて…。

櫻井 お気持ち、わかります。過去につらい経験をしたことがある、という一つの事実をもって決めつけてしまうのはどうか。それよりも、生徒の小さな成長を丁寧に見つめ、信じたいです。ひょっとしたら保護者の方には見せない面を、学校では見せているかもしれません。教員の仕事は不安を募らせることではなく、成長を見て信じることだと今、改めて感じました。

三川 **保護者が子どもの成長を信じられていないとしたら、足りないのは何でしょうか。**

櫻井 **保護者と生徒の対話ですね**（気づき③▼）。進路についてじっくり話している家庭はかなり少ないです。教員には話せるが、親には話せないという生徒も多いように思います。保護者と生徒の対話が不足していて、親が子どものことを信じきれない。また子どものほうも自分の思いを伝えきれていない。だから「学校の先生の仕事はブラックらしいから、やめておこう」などという結論につながっているのかもしれません。教員の関わり方ばかり考えていましたが、保護者と生徒の対話を促すことも大切ですね。

生徒の成長を見て、信じる。そのために足りていないものは何？

気づき③

保護者と生徒の対話が大事だとわかりつつも、どこかで「家庭の問題だからどうしようもない」と思おうとしていたところがありました。三川先生とお話ししながら、三者面談の前に「親御さんとこんな話をしてみて」と声をかけるなど、教員にも対話を促すことはできると感じました。

三川先生との対話を終えて現場の先生が振り返る

あらゆる職業に、人によってはネガティブに捉えられる環境や条件等があるものです。ただ、自分が就いている職業は特別に、いろんな事情が見えやすいのですよね。昨今の教員をめぐる社会の議論もあって、教員を志望する生徒の背中を押していいものかと自信を失っていたのかもしれません。でも、私がそんな姿勢でいては、思いをもって教員を目指している生徒の芽も摘んでしまいかねないと、痛感しています。教員としてのやりがいや魅力は、やはり生徒に伝えていきたいです。

「ブラックだから、できればやめてほしい」と言ってしまう保護者、それを聞いてすぐ諦めてしまう生徒、両者の対話不足の問題も大きいです。教員である自分が生徒にどう関わるかばかり考えていましたが、教員には「対話を促す」という役割もあることを改めて自覚しました。対話が始まるきっかけを与えたり、家で保護者と話をしたくなるような関わり方をしたりすることは、教員にもできるはずです。三川先生との対話を通じて、自分にできること、これからやるべきことに気づきました。

＼ 三川先生からのメッセージ ／

ネガティブな情報があふれる今、魅力を伝えるのも大人の役割

櫻井先生のお話からは「教員に向けられる世間の目が厳しくなっていて、やりがいや魅力を感じていても、伝えるのに躊躇してしまう」葛藤を感じました。昨今、労働環境など仕事の実態について、情報が手に入りやすくなった反面、ネガティブな情報が生徒たちの目に入る機会も増えています。そんな時代だからこそ、私たち大人は、苦しい面だけでなく、仕事のやりがいや魅力、誇りも、若い世代に伝えていかなければ。仕事の魅力を伝えるのは大人の義務と言ってもいいかもしれませんね。また後半、櫻井先生が、保護者と生徒の対話の重要性について言及されました。そのきっかけ作りの一つとして「キャリア・パスポート」があります。生徒自らが、自分のキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、記録していく。これに保護者がメッセージを記入する。そのときにぜひ親子で、対話の時間を設けていただきたいのです。大事なのはコメントをもらう作業ではなく、それを通じて親子の対話が生まれること。現場の先生方には、その対話が生じるように促し、声をかけていただけると嬉しく思います。

本連載で三川先生と対話してくださる先生を編集協力委員のなかから募集しております。ぜひ、編集協力委員にご登録ください。詳細は66ページをご覧ください。